

書家としての蓮沼泰子

本日、「蓮沼泰子さんをしのぶ会」を開いて亡き蓮沼泰子さんを送るに当たり、東欧文化フォーラムの一員として、あるいはきときと会の一員としての蓮沼さんではなく、「書家としての蓮沼泰子」という目で彼女のことを語ってみたいと思います。「書家」であることが、彼女の人生の基本線だったと思うからです。

(蓮沼泰子さんは2018年8月1日に亡くなりました。)

1. 小学校時代の永井泰子

実はわたしは永井泰子さんとは、同じ幼稚園に行っていたようなのです。幼稚園時

代の写真もありますが、だれがどれなのかは分かりません。ですから、この時代はスキップします。

富山大学教育学部附属小学校でも一緒でした。ここは2クラスしかなかったもので、どちらにいても比較的よく交わっていました。彼女は書き方の上手な子でした。年初めの「書初め」の展示では常に金・銀賞をもらっていました。(わたしはよくて銅賞ぐらいでした。)彼女は、富山市の中心部にあるガラス屋の御嬢さんで、お母さんにお行儀などを厳しくしつけられていたようです。いまから思うと、ちょっとおませでアルーフな感じもしました。永井さんのお母さんは同期のクラスの母親たちの面倒をよくみる人であったようで、わたしの母もよく永井家に出入りしていたようです。そこで母親たちは子供たちの学校での言動を教えあっていたようです。

あとで知ったのですが、小学校4年のとき、富山県の書道展で入選しました。そしてその時を機に「書道」のお稽古に力を入れ始めたそうです。お父さんがまた子供の養育に熱心な人だったようで、泰子のお習字の練習を強くサポートしたそうです。これが彼女の人生を決めたのです。

2. 中学校時代

中学校時代は、3クラスあって、クラスが違ったので、彼女とはあまり付き合いはなかく、むしろ黒田君が近かったかと思います。

テニスクラブやソフトボールクラブにいたようだが、漢書がそんなにスポーツがうまいという印象はありませんでした。逆に、書道部にはいなかったようです。いや、諸道場がなかったのかもしれませんが。卒業アルバムには書道部の写真がありませんから。

後年、お酒を飲むと、中学時代、同じく字のうまかった西村一男君に夢中だったとは、よく聞かされたものでした。

3. 高校・大学時代

彼女は、東京に出てきて、青山学院の高等部と大学に学びました。同じく高等学校から東京に出てきていて、渋谷に住んでいたわたしは、渋谷の文化会館横の道で、2, 3度すれ違ったことがありました。やーとか、あらとか、言葉を交わす程度でした。あのころはわたしは同じく東京に出てきて慶応の高校に行っていた橋爪君と比較的よく付き合いがあって、渋谷の大和田の珉珉という中華料理屋でダベッタリしたものです。

蓮沼さんは、大学時代は乗馬に明け暮れていたそうです。学費と称してお父さんからお金をもらっては、馬に使っていたそうです。ここでも書道部には所属していなかったようです。中学校から大学を終わるまで、書道はやめていたのかね。

4. 結婚と「青柳志郎」

大学を卒業して2年後の1966年に、蓮沼英彦氏と結婚しました。蓮沼家は富山の名門の家計でした。富山の砺波には昔「蓮沼城」というのがあったようですが、その関係があったのかもしれませんが。ともかく、祖先は明治期には福沢諭吉に学んだとのことでした。結婚後は、蓮沼家の風習に驚いたようです。なにしろ夕食はナイフとフォークの洋食だったそうです。

このような中で、1970年に彼女のお父さんが64歳で亡くなりました。彼女が29歳の時です。普段から筆で文章を書いていたというお父さんの死を受けて、お父さんの代わりに自分が本気で書の勉強をしようと決心したそうです。しばらくは師に付くこともなかったようですが、1977年に富山の書道家の「青柳志郎」に師事し、書を本格的に勉強し始めました。青柳さんは伝統的な書家で、意味を持つ文字としての要素を残すことを重視した書家でした。蓮沼さんは生きがいを見つけていきいきしていたことでしょう。

1977年に初めて開いた中学同期会はちょうどこのころのことでした。六本木で開かれた同期会の後の写真を見ても、ちょっと魅力がありますね。

5. 「手島右卿」

青柳さんに学び始めて5年ほどして、1982年に蓮沼さんは、「手島右卿」に師事することになりました。手島家で相当粘って入門したそうです。手島右卿は「昭和の三筆」と言われた書家で、1952年に独立書人団を創設し、大字書、一字書の分野を切り開いて、「東洋独特の伝統をふまえ、世界に通じる新しい書を創造する」ことをめざし、いわば書を世界に普及した人物でした。いわば、書を造形芸術として高めた人だと言えるでしょう。この手島の書に蓮沼さんがどう

いうきっかけで出会ったのかは知りませんが、手島のもとで、蓮沼さんも「書」についての考えを変えさせられたのだらうと思います。青柳さんの書とは全く違う書だったのですから。

このあと、彼女は年に2回の大きな展覧会—つまり独立書人団の展覧会（独立書展）と毎日書道展—の準備にまい進し、家でお弟子さんを取って教えるようになりました。月に一回ぐらいは、作品をもって手島のもとへ行き、批評をしえもらったり、年に一回は独立書人団の合宿に参加したりしたようです。

だが、やがて蓮沼英彦氏が「墨のにおいがたまらない」というので別居することになりました。

こういう状況下で、1984年に独立書展で「振」によって特選を取り、1985年には、「継」で毎日賞を受賞しました。そして1986年には独立書人団の準会員に推挙されたのです。しかし、1988年、手島右卿がなくなりました。蓮沼さんの伸び盛りに、彼がなくなったのです。喪失感は大きかったことでしょう。

しかし、まさにこのころ、1987年に那須沼さんも加わって、東欧文化フォーラムを立ち上げ、第一回の日本文化週間を1988年、ハンガリーで開催したのでした。フォーラムの立ち上げの場所である新宿の居酒屋「立山」の写真をみてください。いまにして思うと、書をやっている蓮沼さんがなぜ積極的に東欧での書の紹介に取り組んでくれたのかが、よくわかります。それは、書を世界的に理解させよう、世界に通じる芸術にしようという手島と独立書人団の趣旨に適合していたからなのです。

のちに（2015年）軽井沢で手島右卿の回顧展があるということを蓮沼さんに教えてもらって行って見て、蓮沼さんに「崩」という字が一番良かったよと電話したら、絶句されてしまいました。「あんさん、それは手島右卿がアメリカではじめて展覧会を開いたときに展示したもので、アメリカで絶賛を博した作品なんだわよ」ということでした。「崩」はアメリカ人が文字の意味を分からなくても、falling down という感動を得られる作品なのです。

6. 「貞政少登」と東欧文化フォーラム

1988年、蓮沼さんは手島の弟子の貞政少登に師事することになりました。ここでも、そうとうに粘って入門を許されたようです。貞政のもとでは、書の理念というよりも、技術的な指導を厳しく受けたようです。貞政少登は「墨」の名人として有名であったようです。 ここから

貞政少登のもとで研鑽を積んで、1994年には「門」でふたたび毎日賞を受賞しました。そして、1999年には、「彫」によって独立書人団の会員に推挙され、さらに 2006年には、「澄心」によって同審査会員になったのでし

た。これは書人としては、大変な「出世」だったと思いますが、蓮沼さんはこういうことはあまり言わなかったのです。だからお祝いもしてあげられませんでした。

この時期だったのではないかと思われるのですが、蓮沼さんはリウマチを発症して、

指が動かなくなった時期がありました。そういう時、指に筆を縛り付けて字を書いたと、言っていた。たいした根性です。なおそのときのトレーニングの一つが水泳だったそうで、これはその後ずっと続けていました。

この間、1988年、1993年、1996年、1999年に東欧文化フォーラムの

日本文化週間に参加してくれたのでした。1988年の準備のために、ハンガリーから

著名な美術史家ネーメト・ラヨシュ博士とナイーヴ博物館長のバーンスキ：パール博士

を日本に招いて、蓮沼さんの書も見てもらいました。その時、ネーメトさんは、「これ

は素晴らしい芸術だね」といって、蓮沼さんの作品を高く評価してくれました。これに

は蓮沼さんも大いに元気づけられたようでした。1988年8月のハンガリーでの日本

文化週間の開会式では、ネーメトさんが開会のあいさつをして、蓮沼さんの書の芸術性

を紹介してくれたのでした。蓮沼さんは文化週間では、作品を展示してくれただけでなく、

皆の前でデモンストレーションをして、どのように作品を作るかを、身を以って紹介

してくれました。

なお、1988年のデモンストレーションの時も、1993年の時も、あるいはそれは

それぞれの準備段階においても、蓮沼さんの作品やデモンストレーションに関しして、わたしがいろいろと「注文」を付けたり「批評」めいたことを言うので、1993年には、ついに彼女も「怒り心頭」に来たようで、「そんなに言うなら自分でやってみなさい」と言って、筆を握らされた事がありました。写真にあるとおりです。

7. 個展

2006年に審査会員になったあとの2007年に、蓮沼さんは、大宮のさいたま県立近代美術館で「蓮沼泰子書展」を開催しました。これは大きな書展で、100点近い大小の作品を展示し、蓮沼泰子の世界をみせてくれました。とくに大変に迫力のある大字の世界に圧倒されました。

この時、蓮沼さんはわたしに、『蓮沼泰子作品集』に一文を寄せてくれと頼んできました。まったくの門外漢のわたしに、書の作品集への序文を書かせようと言うのです。驚きました。そこで、いろいろと考えて、「逆転の美」という題の一文をまとめました。ポイントは、文字の意味の分からない東欧の人たちがなぜ蓮沼の書を「美しい」「すばらしい」「芸術だ」と感じるのだろうかという事でした。結局わたしは、手島右卿以来の蓮沼とその書団は、「意味を持つ『文字』がいかに美しく書かれているか」という観点から「書」を見るのではなく、『姿』としていかに美しいか」「なにかを語るか」という観点から「書」を見るのだ、逆に「姿」から感じるものが「書」の意味なのだということを主張しているのだなど、思うと書いたのです。そういえば、手島右卿の「崩」はそうだったのです。

蓮沼さんは、『蓮沼泰子作品集』の中で、「逆転の美」というわたしの一文を、貞政少登の文の次に置きました。貞政少登は、蓮沼さんが東欧と付き合うなかで、自分を磨いてきていることを強調していました。ここでわたしは貞政少登・蓮沼泰子・東欧文化フォーラムがつながったような気がし、さらに蓮沼さんの仕事ももう少し分かってきたような気がしたものです。

8. 遊書会

2010年に蓮沼さんは、「遊書会」を開始してくれました。当初のメンバーは、橋爪啓二、紺道樹義、池田裕子、東誠、山岡直子、水上幹子、山口さん、そして私などでした。その後へってきて、最後は紺道、池田、山岡、山口、私が残りました。

月に一回のこの「遊書会」では、「書」ではなくて、「お習字」を習いました。縦線、横線の書き方から教えてもらいました。蓮沼さんは、筆の使い方などは、さすがに年季が入っているなと思わせましたが、それ以上に、中国・日本の書の古典を実によく勉強しているのに驚かされました。

この「遊書会」ののち、二人だけで飲んだことが何回かありました。その折、ときどき「最近ね、いい作品ができないの」とか「うまく書けないのよ」とこぼすことがありました。そういう時、わたしは、少し絵画の勉強をしてみたら、と言ったことがあります。蓮沼さんは、何か思い当たることがあったらしく、「あん

さんは、私の書の事を一番よくわかってくれているわ」と、酔っ払って言ったものでした。わたしは、蓮沼さんと同じく、ものを作る、作品を作るという点では、共通するものを感じていて、そういうフィーリングが一致したのだと思います。

2016年3月に橋爪君の三回忌をすませた後、蓮沼さんは徐々に衰えていきました。「遊書会」も間遠になりました。歴史文化交流フォーラムとしても、10月に横浜へいったのが最後でした。

そこへ、2017年1月に、貞政少登氏が亡くなりました。作品を持って行っただけで、厳しく叱られた師がいなくなって、蓮沼さんも人生のハリを失ったようでした。このあと、蓮沼さんは、書の世界から少しずつ身を引いて行くようになりました。「なあん、面白いわ」と言っていました。

9. 最後

2017年の2月に、黒田君、紺道君と、大宮駅まで出かけて、蓮沼さんと昼食を一緒にしたのが、直接に会えた最後でした。渋谷に出てくるように誘っても、途中で迷ってしまうのを恐れて、こちらから出向こうやということで、出かけたわけです。

2018年（今年）の4月30日に池田裕子さんが亡くなり、それを知った日に蓮沼さんに電話をしたところ、驚いて泣いていました。声を聞いたのがこれが最後でした。

わたしとしては、書というもの、芸術としての書というものに、多少とも内側から触れさせてもらったことに、深く感謝しています。

ありがとう。